論語と体育

——吉田松陰における体育実践とその解釈学的分析の体育思想史的考察——

水 野 忠 文 (日本女子体育大学)

(昭和61年8月20日受付)

Confucian analects and physical education —theory and practice
by Shoin Yoshida—

Tadafumi Mizuno¹

Abstract

This thesis intends to analyze the physical practice and its philosophical background of a Japanese in the 19th century, when the Western physical education was not yet introduced.

The means of this analytical research was through three letters written by Shoin Yoshida, 22 years-old *samurai*, in 1851 and addressed respectively to his father, uncle, and the elder brother.

It was found, through reading these three letters, that Shoin Yoshida practiced horse-riding and *kenjutsu*, Japanese art of fencing, every two days, and that, he walked 4 kilometers to visit his masters in strategics and Chinese philosophy. He maintained his health in good condition by his hard physical practice.

The first finding is that people of *samurai* cast had acquired their own method of physical practice before the Western physical education was introduced into Japan.

The second point that this thesis emphasizes is that Shoin Yoshida practiced this theoretical physical practice as his duty, i.e. elective obligation for self-training. For Shoin Yoshida, to maintain good health was a moral of human being, and was "Filial Piety" (孝) to the parents. The letter to his father improves his belief.

The health viewpoints of Shoin Yoshida were strongly reflected by Confucian Analects.

(Tadafumi Mizuno, "Confucian analects and physical education —theory and practice by Shoin Yoshida—", *Jap. J. Phys. Educ.*, 31—3 : 181—96, December, 1986)

1. 序 本研究の目的と意義

本研究は、吉田松陰(1830—1859)^{*1)}の嘉永4年(1851)5月の日常生活における体育的実践の記録ともいべき3通の書簡を介しての体育学的考察

である。その目指すところは、第1は江戸末期における一人の若き武士、22歳の松陰の体育実践の事実史的究明であり、第2はそうした事実の背後にある松陰の体育実践に対する思想史的解明であり、この思想史的解明は書簡において叙述された

¹ *Japan Women's College of Physical Education*

体育実践の基底を形成していた倫理的意図とその中心的支柱をなしていたと考えられる思想としての儒教哲学を、解釈学的方法によって明らかにすることであると考えるものである。

私は上記の方法によって、「体育の日常生活化」ということが、わが国ではようやく第2次世界大戦後になって喧伝されてきたが、松陰は既に100年もの昔において、日常生活そのものの中で乗馬や武芸の稽古あるいは歩行などの運動を介して体育的实践を実行しており、いわゆる西洋体育輸入以前の体育実践と体育思想の意義を明らかにすることができるものとする。

なお、ここで予め注意しておきたいことがある。それは松陰という人物についてである。われわれは通常松陰ときけば、直ちに幕末の志士として日本近世史上で活躍した人物の英姿を思い浮べ、僅か30歳の若さで「安政の大獄」に殉ずる^{※2)}という悲壮な生涯を感動的に想起させられるのであるが、ここに取り上げる嘉永4年(1851)5月の書簡は、数年後の彼にみられるような尊王攘夷論的政治指向の行動や思想を思わせる類のものでは全くなかったという点を知っておかねばならない。それらの書簡はいずれも弱冠22歳の松陰が日常生活において常に把持していた健康観とそれにかかわる倫理観乃至儒教思想を表明したものであって、通例の志士というような理念の下に、彼の人物・思想を早呑み込みしたり、誤解してはならないのである。この点は後に引用する書簡の本文をみれば直ちに理解され得るところであろう。

なお本論文で使用した資料は主として次のものである。

1. 吉田松陰全集、全10巻、山口縣教育會編纂、岩波書店刊行、昭和11年(1936)1月13日第1刷発行。

(伝記類は第1巻に、書簡は第5、6巻にある)

なお松陰全集は岩波書店の全集とは別に、大和書房(東京都文京区関口1-33、TEL 03-203-4511)の刊行した吉田松陰全集、山口県教育會編纂(昭和47年12月20日初版発行)があり、この方が読みやすくなっている。

2. 吉田松陰書簡集、廣瀬 豊編、岩波文庫、昭和

和12年(1937)1月。

(書簡は廣瀬によれば約600通もあるとこの文庫のはしがきに記されている)

2. 松陰の江戸遊学開始当初の勉学計画 作成における特色

——嘉永4年(1851)5月5日および
5月20日の書簡——

松陰は嘉永4年(1851)正月18日、長州毛利藩の命令により、「軍学稽古」のため、江戸遊学を命ぜられた。(彼が養子となった吉田家はもともと山鹿流兵学をもって毛利氏に任えていた家であった。)そこで彼は東上するのであるが、その時彼は同藩士中谷忠兵衛の「冷飯」^{※3)}という身分で、同じく「冷飯」であった井上壮太郎(後の書簡に屢々出てくる同僚)と同道して同年3月5日萩を出発し、4月9日江戸に到着、桜田の毛利藩邸に居を定めたのであった。

そして直ちに勉学計画の作成に取り掛かるのであるが、その計画立案の仕方そのものに早くも彼らしい特色がみられるのである。そこでまず、書簡を引用し、勉学計画の考察に進むことにする。

2.1 嘉永4年(1851)5月5日の書簡

父叔兄に贈る——嘉永4年5月5日、
松陰在江戸、父叔兄在萩
「薄暑之節に御座候得共益、以御満家様并閭族御安寧可_レ被_レ為_レ在と奉_二抔_一賀_二候次_一に矩方無異消日仕候_レ憚_二御休意奉_レ祈候_一(筆者注 閭族は親類一同の意、抔賀は手をうってよろこぶこと)

一. 去月廿五日良斎(安積)翁へ入門仕候五ノ日易經、八ノ日論語輪講、一ノ日書經講釈に御座候。……

一. 馬場へも不_レ絶出申候馬多く候に付、馬之稽古は十分に御座候。

一. 当地にても有備館にて三ノ日をトして兵學會を始め申候……御会も毎月十二日二十三日之御日取被_二仰付_一既に今月より相始り候由に御座候……

(御会とは松陰が藩主に講義することと廣

瀬豊の註釈あり、岩波文庫『松陰書簡集』
18ページ)

一、伊助翁（中村）に頼み中庸会初め候様相決
居候……外に大学会始め是は両三度も仕候
……

……………」^{註4)}

つづいて5月20日に兄杉梅太郎に贈った書簡では、(5.5) 書簡をさらに整理し、学習科目を月の初めより、日順に従って配当して次のように述べている。

2.2 嘉永4年(1851) 5月20日の書簡

兄杉梅太郎に贈る——嘉永4年5月20日、

松陰在江戸、兄在萩

四月廿八夜之芳誨今月十五日開折右に当ル答書

一、家嚴君北堂其外閩族御安寧之由奉_二抃賀_一—
候且吏務御紛冗之由定て浚河之一儀快事と奉_二
—想像—候

(以下三項略) ……

一、馬術始め候事

付、剣も折々遣ひ申候

一、会事の多きに当惑仕候

一ノ日良斎（安積）書經洪範口義聴聞

三ノ日武教全書初ノ方御屋敷内之部有備館に
て

四ノ日中庸同前初ノ方

五ノ日朝良斎易会繫辭上伝 午後莊原文助中
庸会中程

九ノ日良斎論語 郷党篇

七ノ日呉子 林寿（林寿之進）・藤熊（藤井熊
之進）と

外

十二日廿三日 御前会、過ル十二日作戰篇ス
ム

二日隔位大学会 中谷松（松三郎）・馬來小五
郎・井上壯太

過ル十七日より宦官会初ル是ハ太宗問対講、
非番之面々不_レ残罷出聴聞仕候巨田（香川
惣右衛門）・深栖其外大分論もいたし候右
之通一月三十度計り之会に御座候古賀謹一

郎えも参候是は質問耳なり折角明日より山
鹿素水えも可_レ参様林家申合置候是亦会可_レ
有_レ之奉_レ存候何分会を減し候はではサバ
ケ不申候且假初にも御当地之会は委しく候
に付集註計り之下見にては不意虚多く御座
候又々模様も御座候は_二奉_二申上_一候

一、九州凶落掌仕候高洲（松陰伯母の婚家）え
宜しく御致聲奉_レ頼候

五月廿日

大次郎拜具

尚_二 時下御自玉奉_レ祈候_一」^{註5)}

阿兄様

2.3 (5.5)・(5.20) の2 書簡の意義——特に勉 学の仕方にもみられる自主性——

上記の(5.5)・(5.20) の2 書簡を合わせて考え
ると、まず第1に内容上からみて、両書簡とも次
の3種の学習内容すなわち

i 武芸の実習

ii 兵学の研究

iii 経学の研究

の組合せから構成されている点が注目される。
そして当然のことながら書簡をみれば理解出来る
ように、その重点は自ら経学が中心となっており、
特に教科目としてあげられているものは、四書の
うち『大学・中庸・論語』の3教科と五經のうち
『易經・書經』の2教科目である。そこには『孟子』
があげられていないが、松陰は4年の後、安政元
年(1854) 4月長州萩の野山獄(同年3月下田港
で米国軍艦に投じて渡航を企てた罪により同年10
月24日長州萩の野山獄に投獄された。)において同
囚の人々に対し『孟子』の連続講義をしており、
後にその講義録を『講孟劄記』あるいは『講孟余
話』として一書に著わしており(これは岩波文庫
に収められている)、孟子に対する理解のほどは十
分に察することが出来るといえよう。

このように別に目新しい教科乃至教科目に接す
ることがなかったとはいえ、その年の17年後に迎
えることになった明治維新とその後の文明開化の
新氣運を思うとき、松陰がうけた、あるいは彼自
身が自らに課したいいわゆる東洋哲学の学習効果は
全くなかったであろうか。否、そのようなことは

あるまい。恐らくそれらの学習内容上の効果は、もちろんなしとはしないであろうが、明治の偉業が松陰の弟子達をはじめ多くの人達の手によって達成されるためには、それらの教科の内容そのものの如何ということだけではなく、それらの勉学の仕方の自主的かつ自由な取り組み方に、すなわち学ぶ者自身が主体的に自由に取り捨選択する方式、わが国の戦前戦後を通じての大学制度でいうところの、聴講しようとする科目の「選択制」ともいふべき勉学の仕方に、それ相応の効果が発揮されたとみるべきではないであろうか。この自主的に学習教科を自ら選ぶという所に、学問の自由の芽も芽生えるのではないであろうか。この2つの書簡のもつ松陰の勉学計画の樹立の工夫・努力の意義は、こうした点に十分に認めることができるといわねばならないと思う。

なおここで一言つけ加えるならば、嘉永4年6月2日付兄杉梅太郎に贈った書簡に

「一 江戸にて兵学者と申すものは尊程無^レ之様相聞候事」

とあるのをみれば、松陰自身いまだ名もなき一人の青年武士であったにも拘らず、この兵学者批判はなかなか辛辣なものがあるのを見逃せないと思う。そこには上述した学問の自由の芽ばえと相ならぶ批判の息吹を感じることができるのではあるまいか。このような思考の仕方が、松陰の弟子たちに伝えられていったことを十分察することが出来るであろう。

3. 体育的实践記録としての(5.27)書簡

松陰は(5.20)書簡の僅か7日の後に、叔父玉木文之進に宛てて書簡を送り、その文中に体育的实践を述べ、その实践を何故するかを理由を論じているのであり、われわれにとって最も注目すべき書簡である。この書簡は8項目約1500字にも及ぶ長文のものであるが、体育实践記録とみなすべきところは、そのおよそ1/5ほどに当るものである。以下その部分を引用する。

3.1 嘉永4年(1851)5月27日の書簡

叔父玉木文之進に贈る——松陰在江

戸、叔父在萩

五月廿七日雨天 是夜九つ時、本月九日ならびに十四日御認め之書到来、欽読仕候事、即御答認候事、

一、閨族御無異何より安悦之事奉^レ存候。矩方も碌々ながら別条無^ニ御座^一候。御放念奉^レ祈候。此節毎早朝より武芸稽古初候迄論語註会読仕候。人数馬来小五郎、井壮(井上壮太郎)に御座候。既に今朝父母唯其疾之憂之章^①に至り、遊学之身は取分け此事に切なる由を論じ、孰も書を廃して三嘆息仕候事に御座候。併しながら^②疾之儀は何トぞ御懸念被^レ成間じく奉^レ存候。何となれば^③飯は四合一勺、放飯度を失う心遣無^レ之、^④運動は馬場天気なれば、隔日に有^レ之、^⑤撃剣も形稽古などとほとほと仕、又^⑥安積(良斎)・古賀(茶溪)・山鹿(素水)など孰え行候ても一里許り之所にて^⑦相応に運動になり申候。然れば^⑧病氣は附ざるが当然に御座候事。或日、御仁恵を以て^⑨同風呂に被^ニ仰付^一候。其風呂之功大なり。五右衛門据風呂之比にあらず。」⁽⁶⁾

((5.27)書簡には、なおこの後に7項の文章があり、「阿芙蓉」とか「西洋学」、「西洋辺之事」等興味ある幕末の海外事情にふれているが、本論の目指すところと直接的な関係があまりないので省略する。)

3.2 (5.27)書簡の分析——体育運動の事実史

この書簡を一読すれば、松陰の日常生活における学問精進と体育的な運動の实践と健康な食生活の様子が明らかになるから、誠に注目するに値するものである。以下それを要約すると次の通りである。(○印内の数字は(5.27)書簡の本文に付けた番号)

- i 論語の勉強会 毎日早朝から武芸稽古が開始されるまで、二人の同僚と三人で実施^①。
- ii 運動は天気がよければ一日おきに乗馬^④を行い、撃剣は形稽古を軽く行っている^⑤。
- iii 歩行としては、三人の先生のお宅を訪ねる場合に、いずれも一里の距離があるので相応の運動になる^⑦と認めている。

- iv このように運動しているので、食事は毎日4合1勺を食べ、それほど無茶食いはしていない③。
- v 入浴はよくしているが、殿様と同じ風呂を使用させて頂き④、その御仁恵を謝していることが、いかにも幕藩体制下の下級武士の日常生活振りを如実に示す文章で述べられており、興味あるところである。そこで以上のことに関して少しく考察を加えることにしたい。

3.3 身体運動の日常生活化の先駆的实践

考察第1 運動直結健康観

(5.5)書簡と(5.20)書簡について、(5.27)書簡を故郷の叔父に送った松陰は、馬術と撃剣はたえず実施していたことは上記(5.5)・(5.20)書簡でも伝えていたが、(5.27)書簡では、安積、古賀、山鹿の三人の先生(前掲(5.27)書簡⑥参照)宅への屢々の訪問学習はいずれも一里ばかりの距離の所を往復することになるから、「相応に運動になり申候」⑦といているのである。そしてそれに続いて「然れば病氣は附かざるが当然に御座候」⑧としているのである。このあたりの文章をみれば、武芸の稽古や学習のための用向きの歩行などが運動になり、それ故病氣にならないと健康に対する自信のほどを故郷に伝えているのである。

このように運動を健康に結びつけて考えているところは、今日考えれば極めて合理的であるとはいえ、その頃までには余り一般には思いつかれていない考え方であったようである。たとえ武芸を実践してもそれは健康のためではなく、武士という身分的職分の故の営みと考えられ、それらが健康と結合するのは一般には明治以降のことになるのである。松陰においてはこのような身体的な運動の営みが、既に日常生活化していることは上記の引用文〔何となればから③、④、⑤、⑥、⑦……然ればの⑧まで〕から十分に認められるところである。身体的運動の実践が、武士なるが故の武技演練という社会的身分上の義務という意味ももちろんないわけではないが、運動が病氣にならないことに直結していると考えられている松陰の健康観は、極めて実践的であり、決してそれはアリス

トテレスが「形而上学でいうところの理論知」ではなく、まさしく同氏の「実践知」というべきものである。しかもこのようなことが西洋保健体育思想——例えば『健康学』²⁷⁾——に接する以前のこととしては極めて意義あることと認めなければならないと思う。

戦後の体育で盛んに体育の日常生活化ということが叫ばれた事情を思い合わせる²⁸⁾と、明治維新のおよそ20年も前の時代でも、青年武士の間によく体育的運動の実践が日常生活化していたことは十分認めることができると思う。

この点については、かつて前川峯雄が『体育の科学』(1976年, Vol 26, 7月号)掲載の論文「体育の現代化」の「(4)生活に組み入れる」の節中において

「体力づくり運動とかスポーツなどは、1カ月に何回かすればそれでよいというものではないと思う。少くとも1週間に最低2回、各回1時間程度やらなければ所期の目的は達成されないのである。この意味で、運動の「生活化」は「日常化」でなければならないのである。」

と論述していることを考えれば、如上の松陰の体育実践はまさに体育の日常化であり、武士階級の人々の身嗜みとして誠に注目し値するものといえるであろう。前川の所論を介してみれば、戦後のわが国民はいまだその頃までに(昭和51年頃までに)日常生活にそれほど運動を組み入れていなかったことを裏書きしているものといわねばなるまいと思う。

以上述べたところを要約すれば、松陰の健康に対する考え方は「運動直結健康観」ということができるであろう。

考察第2 西洋式体育方法輸入以前の江戸末期における武芸的身体鍛練

第2に注目すべきことは、上述の第1の運動と健康の結びつきとも関係することではあるが、明治以降の西洋流体育輸入以前の体育実践の事実である。それは中国古代からの伝統的哲学が精神的訓育に極めて多くの言説を述べてきたのに対して——四書五経などいずれも然り——、身体的鍛練については見るべき所説をさ程多くは残してこな

かったという事実は明らかといえるであろう^{※9)}。しかしそれにも拘らず、上述のようによく身体的運動の営みを実践していたという事実(上述3.3参照)は、誠に見上げたものというべきであろう。松陰は決していわゆる武芸家ではなく、一人の青年武士であったというにとどまっているにも拘らず、身体に健康に意を用いていたという点は、武士たる者の当然の嗜みであったというべきかも知れない。恐らくそうした身体的営みは、中国古典からの教養としてではなく、わが国の武士という社会的身分から必然的に要求される武技演練であったかも知れない。このことは、松陰に先んずること140年の貝原益軒が既に彼の著書『養生訓』において

「士となれる人は、いとけなき時より、書を読み、手を習ひ、礼楽をまなび、弓を射、馬にのり、武芸をならひて、身をうごかすべし」^{※10)}

と述べているところと同じ見解に立つものといえるであろう。益軒の究極のねらいは武芸の上達をのみ目指せというのではなく、武芸の演練を方法として用いることにより、「身を動かすこと」をなすべしとしているのであり、松陰の態度も益軒のねらいに相通じているといえるのではあるまいか。

このように考えてくると、江戸期を通じて、乗馬・弓箭・撃剣等の日常的演練は武士の身嗜みとして、既に彼らの習慣となっていたと考えられ、その演練の仕方が外国からの輸入ではなく、わが国で700年の長期にわたる武家政治が続いたことによる自国発生の武芸的身体鍛練法であったといえることができるのではないだろうか。

ここに私が自国発生の武芸的身体鍛練法といった方法は、明治初年(元年—4年)の時点で藩学の総数255校、諸藩の武芸稽古所総数236校^{※11)}もあったことと考え合わせてみると、西欧的体育意識はなくても武士が身心を鍛えていたことを十分知ることが出来、体育的实践がかなり普及していたことを推測できようかと思うのである。

ところが松陰において上述したように体育的实践が励行されていたとみられる武士の身体鍛練も、明治期に入ると急速に衰え、彼らの体力が減

退していくのであり、この点は森有礼(1847—1889)の明治12年(1899)の論文「教育論——身体能力」において次のように述べているところ、すなわち

「(かつての武士は身体を鍛えていたと思われるが、)……目下情弱、弊習日ニ長ジ、旧時ノ武士と雖、早已ニ之ニ違ヒ、下流に沈溺セザル者甚希ナリ……」^{※12)}

というところからも明らかに往時の武士が身体を鍛えていたことが推測できるであろう。松陰の(5.27)書簡はこのような視点から、それなりの意義が認められると思う。

考察第3 「飯は1日4合1勺」——放飯度を失う心遣無^レ之の心懸け——

この心懸は、若者にありがちな大飯くらいをしない食生活の節制を心していることを述べているととることが出来るであろう。礼記の曲礼に

「放飯するなかれ」(大口に飯を食うなかれ、無作法な食い方をするな。意。)

とあるから、松陰の東洋古典の教養からすれば、礼記の語句を用いたのかも知れない。

日本のかつての旧陸軍の兵1日の食糧は米6合であったこと、また1984年厚生省発表の年齢・身長別エネルギー所要基準量は身長160cm—(1950—2100) kcal, 165cm—(2050—2200) kcal^{※13)}であることなどを考え合わせると、松陰の1日4合1勺は日本人の普通程度の主食の量とみてよいであろう。

4. 松陰の(5.27)書簡で健康報告をした 真の理由は果して何であったか

——松陰の論語為政第2第6章「父母唯其疾之憂」の解釈——

(5.27)書簡の事実史的意義は上述の通りであるが、そもそもこの書簡によって、松陰が叔父玉木文之進に自分の健康に関して自信満々たる心意気を以て

「……疾之儀は何トゾ御懸念被^レ成間じく奉^レ存候。此に居候間は決して病氣は付申間敷く被^レ考候」

といって、その病氣にならない理由として、規

則正しく運動し、食事を節し、よく入浴もしていることなど健康な生活ぶりをあげているのである。そしてここで注目すべきことは、以上の如き文脈において松陰は、此節毎早朝より武芸稽古開始するまで、二人の同僚と三人で『論語』を読み合っていると、具さに勉学状況をしたためた後、既に今朝父母唯其疾之憂之章に読み至った所で、急に論調を変え、自分達が「遊学の身は取分け此事に切なる由を論じ」、三人とも「書を廃して三たび嘆息した」と自己の情感を吐露しているのである。叔父への手紙であるから、このような松陰の真情吐露も誠に結構であろう。しかしどうして『論語』の僅か七文字の孔子の言葉に対して、輪読継続を一時中断して三たび嘆息するほど感動したのであろうか。またそのように感動することができたのであろうか。松陰のこの感動の根拠や理由を究明しなければ、この文脈の流れの急変を理解することができないと思う。これを明らかにするためには、松陰が『論語』をどのように理解していたかを考えなければならない。それには『論語』の解釈が当時一般にどのようなものであったかを先ず知らねばならない。

4.1 『論語』為政第2第6章の解釈

ところで為政のこの章の解釈となると、古来異説の多いところといわれている箇所であり、中国の漢・唐・宋以来の学者の間でいろいろの読み方が行われており、日本においてもその影響が伝えられているのである。そこでここでは、それらの諸説の大勢を知って松陰が果して如何なる見解をとっていたかを推測しなければならないと考える。松陰の頃わが国ではどんな『論語』の註釈本が流布していたかは知ることが出来ない。しかし、元来古典解釈はあまり急に変ることではないものであるから、以下にわが国の1900年以降の主な論語の解釈がこの為政・第6章に関してどのように行われてきたかを、概ね年代順に概観したいと思う。こうすることによって、古典解釈の大要が把握できると考えたからである。

4.1-1 簡野道明の解釈(1928)

簡野道明は自著『論語解義』において

①「父母には唯其の疾を之れ憂へしむ」とよみ、その意味は、

「孔子のたまはく、人の子たる者は親を大切に、品行を正しくして、何事にも父母に心配をかけざるやうに心掛くべし。唯だ不幸にして罹りたる病気のみは（自ら不養生にして招きたる病を除く）心ならずも父母をして憂へしむるなり。」¹⁴⁾⁻¹と。この後で、簡野は、此章は異説多しとして、古義には其疾を父母の疾と為して日く②「人ノ子父母に事フルノ間、其ノ当ニ憂フベキ者甚ダ多シ、然レドモ疾病ノ最モ憂フベシト為スニ若カザルナリ云々」¹⁴⁾⁻²

を掲げている。簡野はこのように其疾を14)-1では子の病とし、14)-2では父母の疾ととるのを異説としているのである。

4.1-2 武内義雄の解釈(1933)

武内義雄は岩波文庫の自著『論語』で

③「子日く、父母〔のためには〕唯其病あらむることを憂へよ」¹⁵⁾

とよみ、〔 〕は武内自身が補足した部分である。其病は父母の病気であるとしている。

(4.1-3) 倉石武四郎の解釈(1949)

倉石武四郎は世界文学大系5の『論語』の自らの訳において

④「孟武伯が孝のことを尋ねた。先生は『お父さんお母さんはその子どもの病気のことばかりを心配なさるものです。』子どももその父母の心をくみとれば、わが身を守るにも謹まずにはおられないわけです。」¹⁶⁾と。

倉石の④のよみ方は、親の子を愛する深い情の誠に自然の発露ともいふべきところであり、後に朱熹がこの章の説明で「父母愛レ子之心、無レ所レ不レ至」というところと全く同じ気持であるとみられ、後述する松陰のこの章の考え方の考察の際、極めて参考になるものとして注意しておくべき所と思う。

(4.1-4) 金谷 治の解釈(1963)

金谷 治は岩波文庫の彼の『論語』で

⑤「子^{のたまは}日く、父母には唯だ其疾をこれ憂えしめ

よ。」^{※17)-1}

とよみ、金谷はこれを古注によったとし、その意は「父母にはたゞ自分の（父母自身の）病気のことだけを心配させるようになさい。」とするのである。金谷はここで漢唐の注釈を古注とし、宋儒の程（伊川・明道）・朱熹の注釈を新注とするという古くからの『論語』の解釈の2大区分を示し、彼の⑤のよみは古注によったものであるとしてこれを自分とはとる」とし、その後活字体を小さくして新注の解釈を次のように示すのである。すなわち

⑥「父母は唯だ其の疾をこれを憂う」^{※17)-2}

と読み、その意は「父母はただ子の健康のことばかりを案じている。その心を思いやって身を護しむのが孝である。」としている。金谷は古注・新注の両者を示し、その当否については何も言及していない。

4.1-5 吉川幸次郎の解釈（1965, 1971）

吉川幸次郎は新訂中国古典選第2巻の『論語』、朝日新聞社（1965）および世界古典文学全集第4巻の『論語』筑摩書房（1971）において、ともに全く同文の解釈を述べていて、「父母は唯だ其の疾を之れ憂う」と読んでいる。そしてその解釈に三通りの説のあることを示し、次のようにいうのである。

⑦一、「病気以外のことでは御両親に心配をかけないようになさい。病気では不可抗力だからやむを得ないとして、それ以外のことでは両親に心配をかけない。そういうふうにするのが孝行です。それが古注に引いた後漢の馬融の説である。つまり、父母として唯だ其の病をのみ之れ憂えしむ」^{※18)-1}。

⑧二、「おとうさん、おかあさんは、子供が病気をしやしないかと、そのことばかりを心配していらっしゃる。父母の子に対する愛は、それほど深い。そうした愛にむくいるべく身をつつしむのこそ、孝行です。そう答えたとするのが、宋の朱熹の新注の説である。つまり、父母は唯だ其の疾をこそ之れ憂う」^{※18)-2}。

⑨三、「子は父母に対し、何よりも父母の健康をこそ憂慮すべきである。老いさき短い父母

について、まず祈るべきものは、その健康である。それが孝行というものだというのが、伊藤仁斎（1627—1705）の説である。清の劉宝楠の『論語正義』によれば、後漢の王充や高誘も、仁斎と同じ説であったらしいという。つまり、父母には唯だ其の疾を之れ憂う。」^{※18)-3}

と。吉川は、自分は若い頃から読みなれているせいか第一の古注の説すなわち馬融の説によって、この章を読んでいっているといっている。同じく古注によるといっても吉川は馬融をとり、貝塚は王充説をとるという点が異なっている。

4.1-6 貝塚茂樹の解釈（1966）

貝塚茂樹はその著『孔子—論語』（1966）において、一応諸説を整理して、以下に述べる2説を示すのである。それは6章の七文字の「其疾」の代名詞「其」が親をさすか、子どもをさすかによって大別する。先ずそれを親とする解釈は⑩「孟武伯孝を問う。子曰く、父母には唯その疾をこれ憂えよ」

とし、「父母にはそのご病気（父母の病気）のことだけを気かけられませ」^{※19)-1}

と解釈する。これは後漢の王充説である。貝塚はさらに、後漢末の馬融の説をあげるが、こちらは「その」は「子どもの」と解し、

⑪「孝子はみだりに病をなさず、ただ疾病あって父母をして憂えしむ」^{※19)-2}（疾病あっては、子どもが病気をすることがあれば、他のことは父母には心配させないが、病気だけは父母をして心配させる）」と注釈をつけているのである。

貝塚はこのように2説をあげ、自分としては孟武伯の父が病身であったので、父のからだのことを心配せよといったのは自然であるとし、またこれがよく歴史的事実と一致するから、自分は王充説をとるといっているのである。

4.1-7 諸橋轍次の解釈（1976）

諸橋轍次は『中国古典名言集』（一）において⑫「父母は唯だ其のやまいを之れ憂う。」とよみ、その解釈は

「親に心配をかけない。それが孝である。世

の父も母も、いちばん心配するのは、わが子の病気である。したがってかりそめにも、自分の不注意から病気にかかるようなことがあってはならない」^{※20)-1}。

そして諸橋はさらに異説も示し^⑨、「其の疾」を父母の病気とし、父母の病気にはとくに気を付けるのが親孝行だとする説もある^⑩とつけ加えている^{※20)-2}。

4.1-8 和辻哲郎の解釈 (1955)

以上述べた7人は皆わが国の当代の中国哲学の専門家であるが、ここにあげた和辻哲郎は倫理学の泰斗であり、『論語』に接する仕方も多少異なっているといえよう。和辻は博士独特の世界の偉人に対する見方をもっており、釈迦、孔子、ソクラテス、イエスの4人を以て人類の教師とみるという「人類の教師論」という独創的な哲学を展開していることは既に世人も認めるところであろう。そこで私が『論語』の為政第6章の和辻の解釈を引用するが、その立場は単なる『論語』の解釈ではなく、『論語』を通しての孔子の説き方を明らかにしようとしたという立場であり、その立場からこの第6章を次のように説明するのである。

⑭「為政篇には孝についての四つの問答を並べ、孝の意義を明らかにするよりも一層孔子の説き方を明らかにしたものである。同じく孝を説くにも、礼なき者には父母に礼を以て事へよと答え、父母病弱なる者には父母の疾を憂へよと言ひ、敬なき者には父母を敬せよと説き、愛嬌なきものには色を和げて事へるのが第一だと教える。これらは（むしろ為政第2の自伝「吾十有五にして学に志し、三十にして立ち……」に続いて）教師として孔子の面影を描いたと見るべきであろう。」^{※21)}

と。（傍点和辻、傍線筆者）

筆者が傍線を付したところが為政の第6章にあたるところであるが、これをみると、和辻は「其疾」を父母の疾としていることがわかる。そしてその見解は古くは後漢の王充以来よくみられる考えであり、和辻の傍点をみるとそこに教師としての孔子の面影が浮かんでくるといえるか

も知れない。

5. 英訳論語について

論語の解釈を以上はわが国の代表的なものについて考察をすゝめてきたが、英訳論語を3点みるのが出来たので、それをまず考察することにする。論語はいうまでもなく、世界的な古典であるから、数多くの訳書があるであろうが、手近にみられる点から東大総合図書館所蔵のものを取り出すことにし、いずれも第2巻、第6章のみをみることにした。

5.1-1 Ku Hung-Ming, "The discourses and sayings of Confucius" (1898)

⑮ 6. A son of the noble mentioned above put the same question to Confucius as his father did Confucius answered, "Think how anxious your parents are when you are sick, and you will know your duty towards them."^{※22)}

5.1-2 Leonard, A. Lyall, "The sayings of Confucius" (1909)

⑯ 6. Meng Wu asked the duty of a son, The Master said: "What weighs on your father and mother is concern for your health."^{※23)}

5.1-3 James Legge, "The four books" (1965)

⑰ 第6章孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂（英訳書であるがその漢文を印刷している）

Chap. VI. Mang Wu asked what filial piety was. The Master said, "Parents are anxious lest their children should be sick."^{※24)}

以上の英訳論語は細部の点ではそれぞれ小差を示してはいるが、概観すれば朱熹の解釈を基調としていると思われる。そして「其」の意味のとり方は、5.1-3のJames Leggeの訳が最も明解であり、＜両親は子供達が病気にならないようにと心配するものだ孔子がいった＞としており、上述した吉川の⑧、金谷の⑥、諸橋の⑫の解釈などと全く同じ見解である。(5.1-1)は、「あなたが病む時はあなたの両親はどんなに心配するかを考えよ」というのであるから5.1-3と

略と同じであり、5.1-2は「何があなたの父母に重圧すなわち心配をかけるか」という意味にとれるから、あなたの健康である」という意味にとれるから、5.1-3と大体同じと思われる。5.1-1も5.1-2も病気をするのは子であり、心配する主体は父母であるといえる。従ってこの両者とも次に述べる朱熹を基調として理解してよいのではないであろうか。

以上を要約すると英訳論語は朱熹すなわち新注の見解に立っているといえよう。なお多くの英訳論語をみないと結論的なことは言えないとしても、「父母には……」というよりも「父母は……」とする方が英語系の人達にはわかりよいのではないであろうか。

6. 朱熹の『論語』の解釈——新注の基調

日本の漢学者や英語系の『論語』の訳文は大別すると古注か新注に属する両派に分けられるようであるが、就中宋代の朱熹の位置は特に重要である。(上述した吉川幸次郎によると伊藤仁斎らを第三類に分けているが、仁斎説も後漢の王充と同じ考えであるとされているから、古注に入れてもよいかも知れない。)朱熹は中国の新注といわれるものの代表であるから、朱熹(1130—1200)の説はみておかなければならない。朱熹は彼の『論語集注』で、為政第2第6章を次のように解釈するのである。

⑮「父母愛レ子之心、無レ所レ不レ至。唯恐_三其有_二疾病_一、常以為_レ憂也。人子体_レ此、而以_二父母之心_一、為_レ心、則凡所_三以守_二其身、自不_レ容_二於不_レ謹矣。豈不_レ可_二以為_レ孝乎_三」²⁵⁾-1。⑯旧説(馬融説)人子能使_二父母不_レ下_三以_二其陷_二於不義_一—為_レ憂而独以_二其疾_一—為_レ甲憂。乃可_レ謂_レ孝。亦通」²⁵⁾-2

というのである。これによると、父母が子を受する心は至らない所がなく、子が病気になることを親は恐れ、いつも心配するものだと言き、親の愛情が真に溢れている見解であると私は思う。なお朱熹は馬融の説にもふれ、馬融は、人の子が不義に陥る故に心配するというのではなく、子が病気になることを以て憂とするのだととっても意味は

通るといっているのである。

朱熹のこの見解が、上述の吉川の⑧、金谷の⑥とか諸橋の⑫、英訳論語⑮⑯⑰等に通ずるものとなることは、容易に理解できるであろう。特徴といえば「父母愛子之心無所不至」と子を受する心の絶大なことを先ず示した点であり、非常に素直な発想である。「孝」を理屈で説くより、親自身の自然の愛情そのものの発露としている所に理解しやすい所があると思う。

朱熹の親の方からわが児へのいつくしむ心情、態度を示すことが真に自然であり、朱熹が馬融の説として、子が不義をすることがあった時に親が心配するのではなく、子が病気をする時にこそ本当に親は心配するものだ、そしてそれを孝と言うべきだといっていることもよく意味が通ると朱熹はいうのである。この考え方も子が自分で如何ともしがたい子の病気を親の方が子に向けて心配するのは自然の情であり、それも孝といっても「亦通」といい、よく意味が通ると朱熹の馬融説に示した見解⑯も私は十分理解出来ると思う。人為的にした不義の行為を心配することなく、子の病気に對して心配するという自然主義的ともいうべきか、あるいは子に対して自己責任を要求するという孝行観も考えてみる価値があろう。私達は余りに親孝行をもって孝行というと考えすぎをしているのではなかったろうか。これは松陰の論語理解の7-2で更に考察することにした。

7. 『論語』の解釈の2分類と松陰の論語の受け止め方

——解釈の正当性の問題から妥当性の問題への移行——

『論語』解釈の分類の試み——代名詞の指示の仕方の相違による分類

7.1『論語』の解釈本は、わが国では平安朝頃より以来極めて多数存在していることはいうまでもないが、われわれが今日比較的容易に手にすることが出来るわが国の著名な中国哲学者諸氏の『論語』の解釈を和書より8点、英訳論語より3点、中国『朱熹集注』(日本の印刷による)の1点を通覧してきた。そもそもそのような通覧を試みた所

表1 「論語」為政第2第6章「父母唯其疾之憂」の解釈において「其疾」の「其」が指示するものによる分類

本論文における節の番号	著者	著作		「其疾」の「其」を		本論文における文献番号
		年代	順位	A 父母とするもの	B 子とするもの	
4.1-1	簡野道明	1928	①		◎	12-1
			②	○		12-2
4.1-2	武内義雄	1933	③	◎		13
4.1-3	倉石武四郎	1949	④		◎	14
4.1-4	金谷治	1963	⑤	◎		15-1
			⑥		○	15-2
4.1-5	吉川幸次郎	1965	⑦		◎馬融	16-1
			⑧		○	16-2
			⑨	○		16-3
4.1-6	貝塚茂樹	1966	⑩	◎		17-1
			⑪		○馬融	17-2
4.1-7	諸橋轍次	1976	⑫		◎	18-1
			⑬	○		18-2
4.1-8	和辻哲郎	1955	⑭	◎		19
5.1-1	Ku Hung-Ming	1898	⑮		◎	20
5.1-2	Leonard A. Lyall	1909	⑯		◎	21
5.1-3	James Legge	1965	⑰		◎	22
6.1	朱熹	1130	⑱		◎	23-1
		-1200	⑲		○馬融	23-2

備考

- ◎印は訳者本人の採用しているものをさし、◎印は特に新注の代表者をさす。
- 表のAに属するものは主として古注、Bは新注に属する。馬融は後漢末の人物故古注に属するが、その疾を子の疾とするからここではBに入れた。
- 印は本人が異説としているものをさす。

(本表は1986年7月筆者作成)

以のものは、年代的にみて既に今日から135年ほどの隔りをもっている吉田松陰が、どのような『論語』の理解をもっていたかを推測することを可能にすることであり、それによって松陰らが輪読会を一時中断することになった事情(5.27書簡の①および②に述べられている)を諒解できることになると考えられたからである。そしてそこにはまた松陰の健康観や倫理観も潜んでいると考えられるから、この辺の事情を十分分析することは本論文の課題「論語と体育」を考察する上で極めて重要なことであると考えられるからである。

そこで先ず上述した貝塚茂樹の4.1-6に示す方法に従って為政第2、第6章「父母唯其疾之憂」の「其疾」の代名詞「其」が父母をさすか、それ

とも子をさすかに着目して上記12名19通りの解釈を分類し、表1に掲げることにした。

表1をみると、ここに取り上げた19点の『論語』の解釈は、「其疾」の「其」を父母とするものと「子ども」とするものと略々半数ずつに分けられる。しかしどちらか正しく、どちらか間違っていると結論するわけにはいかないのである。同一人で、一方を異説としながらも、その両説を掲げている者も5人もいるのである。結局為政第2第6章の解釈には両説があって、その正否を決することは出来ないとみなければならない。すなわちどちらの解釈もあり得るのであり、どちらの解釈も否定することは出来ないのである。それは第6章の本文である孔子自身の回答が僅か7文字しか述べら

れていないということのために、古来多くの解釈・異説が存在してきたことになったとみななければならないのである。

以上、『論語』解釈に大別して両説があることは、今日の代表的日本人学者8人の所説を総括してみた結果であるが、このようなことは現代の中国人学者においても考えられるところである。現在本学に留学中の黄江敏（中国）を介して、湖北大学中文系古漢語教研室劉宋川副教授の見解を質したところ、概ね次の所見を受領することが出来た。すなわち

「父母が心配していることは子の病気であるとする見解と、もう一つの解釈には子どもは父母の病気を非常に心配しなければならないというのとがある。そして

『兩種説法都通』＜論語の現代訳＞（江西人民出版社）は両方の考え方がともに通ずるが、この本の訳は前者の説明（父母が子の病気を心配する）をとっている」

というのである。」

このように両説併存が中国においても考えられていると、この1例から考えられるのである。恐らく中国の場合も、わが国とほぼ同様の見解の流れが現存していると思われるのである。

そこで問題は、『論語』解釈の正当性の追究を去って、松陰の『論語』の理解の仕方をどう考えるか、松陰の5.27書簡の文脈にとって、どちらの見解をとるのが、最もよく輪読一時中断事情にあてはまる、つまりよりよく妥当するとみるかの問題に進み、今や正当性の問題を離れて妥当性の問題の考察に移行しなければならないと、私は考えるのである。

7.2 新注による『論語』解釈——和辻哲郎の孝の本来の意義、孝と親孝行の別

さて『論語』解釈がいろいろある中で、5.27書簡の文脈に最もよく妥当するものを探らなければならない。そこで表1の分類をもう一度よく吟味してみると、少なくとも〔主語〕と〔述語〕がはっきりしているもの、すなわち表1の発表順位番号の④、⑥、⑧、⑫、⑮、⑯、⑰、㉔のグループ（これを第Ⅰ型とする）と、それ以外を第Ⅱ型として

類別することが一応できるのである。第Ⅰ型はいずれも㉔の朱熹の解釈に従うものであり、新注に属するものである。そこで第Ⅱ型は当然古注に属するものといえるのである。

そこで第Ⅰ型に属するものを、文章の構造上からみると、主語となるものは皆「父母」であり、父母が自分の子の病気を「憂う」という述語で締められているという文章構成を示しているのである。第Ⅱ型の訳文では主語（あるいは準主語）・連用修飾語・述語等の構成要素の組み合わせ方がいろいろの形をしているのである。多くは子あるいは子たるものが意味において主語となっているが、心配することがらも父母自身の病気であったり、子の病気であったりするし、心配する主体も父母のこともあり、子のこともあるなど、第Ⅱ型に入れるべきものは訳文の構成が明確に整理しがたいのであり、なおさらに細分類することの方が妥当するとみられるのである。

そして孝の意味も多くは子が親に対してとる態度、すなわち日本語でいう『親孝行』の意味がほとんど全体に共通しているようにみられる。しかし子が父母に対してつかえることだけが孝ではなく、親が子に対して思いやることも孝といえることは、和辻哲郎がその『倫理学』中巻119—120ページで述べているところから明らかである。すなわち

「古来最も多く孝として説かれたのは親の子に対する関係ではなくして、子の親に対する関係であった。尤も『孝』の概念が初めより一方的に子の親への奉仕のみを意味していたかどうか疑わしい。鎌倉時代の戦記物は親の子に対する慈愛をも『孝養』と言い現わしている。……その後、『親孝行』という限定的な言葉が一般に行われて来たが、もし孝行が本来親に対するのみのものであるならば、それを更に『親孝行』として限定する要はないのであるから、孝の本来の意義は親子の相互関係を指したと解せざるを得ない。……」²⁶⁾

と述べているところを考えると、新注で朱熹が子に対する慈愛の深い思いやりはまさしく孝であり、親は本来のように子の健否を思うものだとい

う孝の説⑩は、和辻の上記の説明と全くよく合致するものといえよう。

また為政第2第6章で孟武伯に孝を問われ、孔子が「親とは子の病気を本当に心配するものだ」と答えたことを思い合せれば、ここの和辻の解釈も誠によく生きてくると考えられるであろう。

さて以上の所説に従って、『孝』を親子の相互関係における双方の側からの他の側への態度のとり方を指す概念と規定してみると、第Ⅰ型の解釈は一層よくこの『孝』の概念に適合することが明白となる。そこで第Ⅰ型の訳文を上記の4, 5, 6節からいくつかを例証としてあげてみることにする。

(1) 倉石武四郎は

「お父さん、お母さんはその子どもの病気のことばかりを心配なさるものです。」子どももその父母の心をくみとれば、わが身を守るにも謹まずにはおられないわけです。」(倉石④)と、

(2) 吉川幸次郎は

「おとうさん、おかあさんは子供が病気をしやしないかと、そのことばかりを心配していращる。父母の子に対する愛はそれほど深い。」(吉川⑧)と、

(3) 英訳論語では James Legge が“Parents are anxious lest their children should be sick.”

としているのである。

このように第Ⅰ型の新注の解釈はまことにその意図が明白ということができるのである。第Ⅱ型ではなお種々の見解があって、このようにすっきりさせることは出来ないものであり、さきに私は細分類の可能性を示唆したわけである。

松陰と『論語』新注と和辻哲郎の『孝』の

7.3 概念規定との関連——新注による論語解釈の妥当性

以上の朱熹の新注の解釈に、和辻哲郎の『孝』の概念の親子の相互関係規定を合せて、松陰の5.27書簡の文脈との関係を考えると、一連のこの三者への関連を明らかにすることが出来ると思う。

先ず新注による為政第2第6章の解釈を

「父母というものは、とにかく子どもの健否を何

よりも思うものだ」

と把握すれば、それは正しく和辻の『孝』の概念の一つの規定に合致するし、これは朱熹のいう「父母愛_レ子之心無_レ所_レ不_レ至」に通ずることが明らかとなる。このように考えてくると、こうした解釈を胸中に懷いておれば、遠く250里も隔った長州にいる父叔兄らが江戸在住の松陰の健康を心配するものだと、孔子のこの章の答えのように松陰が父叔兄の気持の慈愛の深さを推察するとするならば、書簡において論語の為政第2第6章を読み下った瞬時に、父叔兄の愛情の深さに思い当って必ずや感動し、「輪読の一時中断・嘆息しばし」ということは大いにありうると考えられるのではないであろうか。またこのように考えてくれば、「輪読中断・嘆息」の後に、父叔兄の松陰に対する心配に対する返答として、「御懸念下さるな。松陰はこのような元気です」(5.27書簡②の箇所)という健康報告も十分意味のある手紙文の流れとなっていくことを読みとれるのではあるまいか。

もしそれを古注の流れの「孝すなわち親に対する子のあり方」を強調するのであれば、孝の説明としてだけ切り取ってみれば、それだけの意味はあるとしても、何で親に「御懸念下さるな……」とか「自分は元気です」と報告したり、また「輪読中断・嘆息しばし」などと手紙に書くことが出来ようか。文脈の流れは分断に分断をかさねる読みにくさが前面に出てくることになるのではないか。それであるから、松陰の論語理解は新注の線に立つと考えるべきであり、新注をとることの妥当性を認めることになる、私は考えざるを得ないのである。そこで私は

＜松陰の論語解釈・論語理解は新注の線に立っている＞

と解するのが至当であると考えられるものである。

7.4 松陰の新注による論語解釈の証拠づけ

なお松陰が新注の線に立つことを裏づける証拠としては次の3点が考えられる。

〔第1に〕考えられることは、当時江戸末期においては漢学の主流は朱子学であったことである^{※27)}。

〔第2に〕松陰は他の書簡で、朱熹の『集注』に

おける見解と極めて酷似した表現を用いている——すなわち、東北遊歴の途次新潟で作った詩の中で

「……

……男兒欲_レ遂_二蓬桑志_一。 家郷更為_二父母憂_一。

父母憂_レ子無_レ不_レ至。 応_レ算今夜在何州。

……」^{※28)}

(嘉永5年閏2月15日, 1852 父叔兄宛書簡中の詩)

と述べている。下線の部分は、『朱熹集註』の為政第2第6章の註釈のところで、朱熹が「父母愛子之心，無_レ所_レ不_レ至」と述べている所と、極めてよく似ており、松陰が新注の線上にあることを十分物語っている箇所といえよう。

〔第3に〕これは松陰が安政の大獄で死刑に処せられる七日前の親許へ送った訣別書中に、死罪の覚悟も定まった心境を和歌にしたものと思われるが、その歌は真実のところ、朱熹の見解そのものが松陰の心の奥深く浸透していたことを、誠に自然に表出したものと思われるものである。すなわち

「親思ふところにまさる親ごころ

けふの音づれ何ときくらん」^{※29)}

と。これはまさに新注の理解なくしてはうたい上げることが出来ないものであると思う。

このような3点をも加えて、私は5.27書簡の「父母唯其疾之憂」を新注の線に沿って理解するものであり、こう解することによって、新注による論語解釈の妥当性を十分肯定出来るものと思う。

7.5 松陰の心情と解釈学

私は以上の如く、「松陰の新注論的論語解」をやや長文になったが、如上の通り論述して来たのは、かつて和辻哲郎が解釈学(Hermeneutik)について

「解釈学を成立させたシュライエルマッヘルの大胆な命題——著者が己自身を理解していたよりも一層よく著者を理解するのが解釈学的方法の最後の目標である」^{※30)}

といったことを、私はようやくここに実現し得た

と思うからである。このような一見迂路と思われる考察を行うことによって、5.27書簡における松陰と論語の関係すなわち松陰の心中に深く根づいていた儒教哲学・儒教的倫理観と身体的健康との関連を明白にすることが出来たと思う。

8. 結 語

以上を要約すると、松陰の書簡3通を分析し考察することによって幕末における武士階級にある青年の日常生活における体育実践の実情を明らかにすることが出来たと思う。それは実際には乗馬であり、撃剣であり、歩行や入浴であり、健康な食欲であったのである。それによって松陰は十分に健康と体力を保持していたことを故郷に伝えているのである。

そして彼が自らの健康状態を親許に報告する機縁となったのは、『論語』為政第2第6章の

「父母唯其疾之憂」

という僅か七文字の孔子の言葉であったのであり、この短い文言によって、人倫の道に立つ親の慈愛の情の深さに松陰がふれたためであったのである。松陰にして孔子の哲学に対する深い理解がなかったならば、またそうした倫理観をもっていなかったならば、彼は体育的实践をも、またその結果としての「運動直結健康観」も述べなかったかも知れないのである。

松陰が父叔兄に対して憂えしめることのない健康さを運動実践によって保持し得たことを、心配御無用と断言した言葉の裏に十分推測できると思う。このようなところに松陰の古典に対する生きた教養の色の鮮かさを十分にとらえることが出来るのではあるまいか。

私は本小論の研究によって、明治維新の日本の近代化の推進に幕末以前から、武士階級が身体的体力・健康の保持増進をはかっていたことを明らかにすることが出来たと思う。

松陰の日常生活における体育的実践の効果の少なからぬものがあったことは、彼の1851—1859年間の活動の実際を——萩—九州旅行、萩—江戸遊学、江戸—三浦半島への黒船来港の観察旅行、江戸—下田旅行(米艦渡航のため)、その他東奔西走

の大活躍等——をみれば、彼の身体の強健さを十二分に察することが出来ると思う。

わが国の近代化の進展に、知的効果を過大評価したために、その基礎となっていた当時の識者の健康と体力が与っていたことを過小評価したことがなにもあらずということを見逃してはならないと思う。

最後に、1986年4月23日臨時教育審議会は第2次答申を行ったが、その発表文中において明治100年のわが国の発展の相を要約して、「追い付き型近代化」という概念で繰り返し述べている。そうした思想の基底には必ずやそうした知性の展開を可能にした健康と体力の存在を認めねばならないと考える。

青年吉田松陰が示した体育実践の日常化と、その底に流れていた人間存在としてのあり方になった健康・体力・倫理の構造連関を、本小論に私が取り上げた松陰の3通の書簡が明示したことを認め、その重要な意義を明らかにすることが出来たと考えるものである。

最後に本論文における松陰の書簡の読解にあたり、日本女子体育大学の故町田孝子教授、穴水恒雄教授、橋本真理子助教授の協力を得たことを謝するものである。

注

- 1) 吉田松陰は天保元年(1830)8月4日長門萩に杉百合之助常道の次男として生れ、天保5年(1834)父の弟吉田大助賢良の假養子となり、翌年吉田姓となる。松陰名は矩方、初め虎之助、後に大次郎、松次郎、更に寅次郎と改めた。松陰とか二十一回猛士とかはいずれも号である。家禄は57石6斗であった。安政6年(1859)没。
 - 2) 松陰は安政の大獄に連座し、安政6年10月27日、伝馬町の獄舎において死刑に処せられた。その時刻については2説があり、その1は午前10時——門人飯田正伯・尾寺新之丞の報告による。その2は九ッ時頃(今の正午頃に当る)——同獄者又は獄卒の伝聞によるがこれは同獄者鮎沢伊太夫の遺書によるとされている。
- 以上は『吉田松陰全集』第1巻、37ページ、岩波書店、1936。による。
- なおさらに松陰の死刑については、前掲書第1巻201ページに次のことが付言されている。すなわち「伝えるところによれば、奉行の處罪原案は流罪であったのを、伊井大老が死罪と書き改めたという」と。私は和辻哲郎

博士がこの点について、昭和13年度の東大文学部倫理学科日本倫理思想史演習の授業の際に

「大老は朱墨をすり、流罪の2字の上に縦に2本の朱線を引き、その右側に死罪と朱書した」

とつけ加えられたのを、松陰の伝記報告書者であった筆者は明確に記憶している。

- 3) 「冷飯」は家督を相続しない次男以下のものをいう(『広辞苑』)。ここでは「冷飯とは藩主の行列には加わず、しかも藩吏の誰かの食客となって行程を共にするものの謂である」と説明されている。前掲書、第2巻、34ページ。
- 4) 前掲書、全集第5巻、35—37ページ、父叔兄に贈る書簡、父は杉百合之助(禄高26石)、叔は玉木文之進(杉百合之助の三番目の弟)、兄は杉梅之助、(5.5書簡と略称する)。
- 5) 前掲書、全集第5巻、41—43ページ、兄杉梅太郎に贈る書簡、(5.20書簡と略称する)。
- 6) 前掲書、全集第5巻、43—44ページ、叔父玉木文之進に贈る書簡、(5.27書簡と略称する)。
- 7) 杉田玄端訳『健全学』、英国の医官ロベルト・ゼエムス・メン著1856年(安政3年)とあり、その下編、第12篇「大気浴湯及び運動を論ず」において「身体各部は使用に因て強壯となり、使用せざれば衰落す」と述べている。これは明らかに西洋保健体育思想といえよう。(本書は雄松堂により復刻されている)。
- 8) 前川峯雄「体育の現代化」『体育の科学』、1976年、Vol. 26、7月号、485ページ。
- 9) 拙著、『体育思想史序説』、世界書院、1967、9ページ。
- 10) 貝原益軒、『養生訓』、(1713)、巻第1、岩波文庫、35ページ。
- 11) 武芸稽古所は安永(1772—1781)年間より明治の間を概観すれば、師範道場26、稽古所112、武学校29、文武館48、兵学校21、計236である(教育学事典、1956)。
- 12) 森 有礼、『教育論—身体能力』(1879)、東京学士会紀事第1冊、森 有礼全集第1巻、325—6ページ、1952。
- 13) 厚生省保健医療局健康増進栄養課編、『年齢身長別エネルギー所要量基準』(1984)。
- 14) 1.2 簡野道明、『論語解義』、明治書院、1961、40ページ。
- 15) 武内義雄、『論語』、岩波文庫、1963、29ページ。
- 16) 倉石武四郎、『論語』、初版はしがき、1948、[世界文学大系69、『論語・孟子・大学・中庸』、1968、筑摩書房、初版第一刷、141—150ページ]。
- 17) 1.2 金谷 治、『論語』、岩波文庫、1963、29—30ページ。
- 18) 1.2.3 吉川幸次郎、『論語』、上、新訂中国古典選第2巻、朝日新聞社、35—36ページ、1965。
(なおこの『論語』上巻のまきがきには1959年1月と書かれてあるが、この書のはしがきには1965年7月末とされており、はしがきの日付は発行年月1965年12月1日と同じであるからこれを掲げた。)また吉川幸次郎の同文の

- 『論語』の訳が世界文学全集第4巻、筑摩書房、1971、35—36ページにある。
- 19)-1.2 貝塚茂樹、『孔子—論語』、世界の名著3、中央公論社、1966、77ページ上欄、下欄。
- 20)-1.2 諸橋轍次、『中国古典名言集』(一)、講談社学術文庫、1976、49ページ。
- 21) 和辻哲郎、『孔子』、角川文庫、1955、77ページ。
- 22) Ku Hung-Ming, "The discourses sayings of Confucius", Kelly and Walsh, Limited.: Shanghai, Hongkong, Yokohama, Singapore, 1898.
- 23) Translated by Leonard A. Lyall, "The sayings of Confucius", Longmans, Green Andco. 39 Paternoster Row, London, New York, Bombay, and Calcutta, 1909.
- 24) 華英対照四書, The four books, 原著者 James Legg, 中華民國五十四年十一月再版(1965)
- 25) 朱熹、『論語集註』、簡野道明補註、明治書院、1932、14ページ。
- 26) 和辻哲郎、『倫理学』中巻、119—120ページ、岩波書店、1942。
- 27) 倉石武四郎、『論語』、世界文学大系、69、筑摩書房、初版はしがき、五、1948、146ページ。
- 28) 『東北遊日記』、吉田松陰全集、第7巻、230ページ、(嘉永5年(1852)、閏2月15日)、この日新潟に宿し、詩を作り、その中で「……家郷更為二慈親憂一。慈親憂レ子無レ不レ至。……」と記している。これは岩波書店、山口縣教育會、昭和10年2月9日第一刷発行、であるが、父叔兄に贈る、嘉永5年閏2月15日(松陰在新潟父叔兄在萩)の書簡(岩波全集第5巻117ページ)に同じ詩を書き送ったが、詩中の慈親を2箇所とも父母としているのである。このように慈親を父母とすると朱熹の所説(父母愛レ子之心無レ所レ不レ至)と一層接近するから、松陰の心中に新注の精神が流れていることを一層明白に推測することができるといえよう。慈親と父母との変化の理由はさだかでない。その書簡は5,27書簡の約9ヵ月後である。
- 29) 吉田松陰全集第6巻、407ページ、父叔兄に贈る書簡、安政6年(1859)10月20日、松陰在江戸獄、父叔兄在萩。この歌はこの父叔兄への最後の手紙となるものに書かれている。その意とするところは子が親を思う以上に親が子を安んずるところを明らかにうたいあげているのである。明治維新の僅か10年前のことである。
- 30) 和辻哲郎『人間の学としての倫理学』、岩波全書19、解釈学的方法、1936、251ページ。